

ゆる唯一のものである。私は此の一例から、九州地方、奈良縣下の裝飾古墳にも、前方にもと祠堂があり、そこに壁畫の描かれてゐたものもあつたのではないかと想像して見る。

昭和十八年八月十四日

笠置寺の岩壁畫

一 笠置寺の創立

笠置寺の創立に關する事情、其の年代は早くも平安朝の末には明らかでなかつた。延喜式卷卅九 内膳司に「相樂郡鹿鷲園」とある如く、もとは鹿鷲と書いたらしいのに、今昔物語集卷十には早くも「笠置」といふ字面に基いて、周知の如き著名な物語が記されてゐる。併しあの物語に鹿狩をしたとあるのは、鹿鷲の字面から來てゐるよう。又良辨が此の磨崖佛を「見付ケ奉テ其後ヨリ行ヒ始タル」とあることは、此の磨崖佛や笠置寺のことが東大寺の記載に多く見えることと照合して、之が東大寺との關係に於て造顯されたことを暗示してゐる。東大寺要錄卷六の末寺章第九には新藥師寺の次に、第二位に「笠置寺」とあり、東大寺續要錄卷八 寺領章にも「一末寺」として劈頭に「笠置寺山城國 件寺廻田所出四十餘石也近來止石許也、爲庄主 沙汰、不及本寺年貢」とある。恐らく之に近い關係は創立當初よりあつたのであらう。

笠置寺は彌勒石像を本尊として創立された寺で、所謂笠置寺とは此の磨崖佛と其の前の禮堂の謂である。此の寺の名の記録に於ける初見は、東大寺要錄卷五 別當章 第七の第廿八、大法師玄津の任記の

元慶元年、笠置寺八講始行、時座主慶祐大徳

であるが、恐らく此の寺の創立年代、詰り彌勒佛の造顯年代は奈良朝、或は平安朝初期に溯ると見られる。といふのは笠置山から奈良朝式の上圖の如き鏡瓦を出土してゐるからで、瓦は禮堂、或は僧房に使用されてゐたものと推定される。



第 214 圖 笠置寺出土瓦
(鈴木吉治氏藏)

笠置寺縁起に

元弘元年辛未八月廿八日、戌刻ニ城中ニ火ヲ放ツ間、寄手ノ軍兵亂入畢、是ヨリ宮ハ又和東ヘ行幸成セ給フ、然間寄手兩ノ口ヨリ亂入テ所々ニ火ヲ放ツ間、本堂ヲ始テ、堂塔坊舎、鐘樓、經藏、悉被燒拂畢ヌ、僅ニ千手堂、六角堂、大湯屋バカリソ殘リケリ、爰ニ颯風頻ニ吹テ、本堂ノ猛火本尊ヲ覆、石像燒タダレテ、化人刻彫ノ尊容已ニ埋没セリ

とあるので、一般には彌勒石以下の諸磨崖佛が燒失して判明しなくなつたのは元弘元年以後のこととされてゐる。併し鎌倉初期には完成してゐた覺禪鈔に示す此の彌勒石の圖を見ると、中尊は既に踏分蓮座の上に立つてゐて、一見して之は大野の石佛を寫したものであることが分り、左右の比丘形も一人は描かれず、描かれてゐる一比丘の持物や中尊の衣文も異なるから、彌勒石の像様が地上から姿を消したのは、鎌倉以前の火災によるということが明白である。ところが醍醐雜事記卷七に

天治二年（中略）同五年庚戌二月廿六日、清瀧會、四月 日、笠置寺禮堂燒亡、佛御足燒云々

とあつて、中尊の足部の不明になり、ために誤られた事情がよく分るのである。兩比丘は中尊に比べると餘程小さいものであつたから、恐らく之も足部と、もに燒失したのであらう。そのために覺禪鈔に誤り描かれたものと見られる。吾妻鏡卷十元久元年四月の條に

十日癸卯、晴、笠置解脫上人使者去比參着、於當寺、可建禮堂間、所申將軍家御奉加也、仍今日賜砂金已下重寶等於彼使、但無御奉加之狀云々

とあるのは、此の火災後の再建のことをいふので、工學博士故足立康氏が之を改造と解されたのは誤である。

三 彌勒石の彩色に關する疑

本朝世紀、久安五年五月十二日の條に、鳥羽法皇が卿相兩三人を仙洞に召され、得長壽院の修理に當つて其の本尊を移動させることの可否を御下問になつたところ

左大將雅定卿、權大納言伊通卿等申云、御佛靈驗佛也、輒不可奉動者、以大木、扶持御堂、何不叶哉、若猶可傾者、西方、可作廊二字、東大寺大佛新、以開眼之後、烏雀犯之、笠置彌勒、加彩色之後、靈驗惟少、准此等例、更不可動

と言つたとあり、沙石集にも「笠置の彌勒はいろどり奉て後、靈驗御坐さすと云へり、古き佛像はたゞ其のまゝにてあがむる一の様也」とあるので、足立博士は「この彌勒像は當初着色されてゐなかつたが藤原時代頃新たに彩色が加へられた」と斷定してゐるが、之は本朝世紀のみからの氏の獨斷で、氏に倣つて沙石集を基準にして斷定すれば、鎌倉頃新たに彩色が加へられたことになら



第216圖 笠置曼荼羅部分(原富太郎氏藏)



第215圖 彌勒菩薩畫像集に見ゆる笠置の彌勒

う。併し私は彌勒石に造顯當初には彩色がなかつたとは考へない。此の石佛が奈良朝の造顯であれば、必ずや彩色を施してゐたであらう。唯大治五年四月の火災に彩色が汚損したので、新らしく生々しい彩色を加へ、ために不評判であつたことが覗へる。法隆寺別當次第等に彩色の塗替へを一々塗替へと記さずして、唯彩色といふのを参照すべきである。今日でも古社寺の修理彩色を見ると、好古趣味の人は大抵悪口を言ひ、等しく修理以前の古色蒼然としてゐた方がよかつたと非難するものであるが、此の場合は殊に一場の論争であるから、言葉の言ひがかり上、又筆のすきびから、造顯當初の彌勒像に果して彩色があつたか無かつたかを十分調査吟味しないで、恐らく火災や雨露で大半は剝げてゐたであらう彩色石像を、本來彩色のなかつたものと見誤つたものと考へられる。何れにしても此の磨崖佛が本來彩色像であつたことは動かない事實で、此の點岩壁畫として尊い作例であつた譯だ。

四 兩比丘形の形式

仁和寺の靈寶館に彌勒菩薩畫像集といふ平安朝の圖像集がある。畫像集といふが畫像の彌勒像を集めたものでなく、著名な彌勒像を集めたもので、清水寺塔の條に「自嘉祥元年、至康和三年、成二百五十四年」とあり、關寺の條にも「自伴年、至康和三年辛丑、成八十年」とあるから、之が康和三年に書かれたこ



第 218 圖 慶州石窟庵の十大弟子像



第 217 圖 天龍山石窟の比丘像

だしく原形から崩れたものに相違なく、原富太郎氏藏の笠置曼荼羅の比丘に見る形がより原形に庶幾い筈である。それは慶州石窟庵の十大弟子中の一人の形や、一乗寺に藏する一老比丘の形を見られ、ば直ちに分らう。衣はもつと高く擧げて心に佛を念する形をしてゐた筈で、康和本が漠然と仰いでゐるのは供養比丘の形ではない。何れにしても之等の兩比丘は兩脇侍ではなく、釋迦の兩脇侍として十大弟子中の阿難と迦葉を置く類とは別で、従つて之等の比丘形は誰の像と限定して造顯されたものではないと思ふ。大陸の諸石佛三尊形の兩脇にある比丘形を、任意に拉し來つて模したものであり、私は笠置の彌勒石に於ても比丘形は頭光を負つた浮彫であつたと信じてゐる。

五 藥師石 文殊石 兩界曼荼羅石の解釋

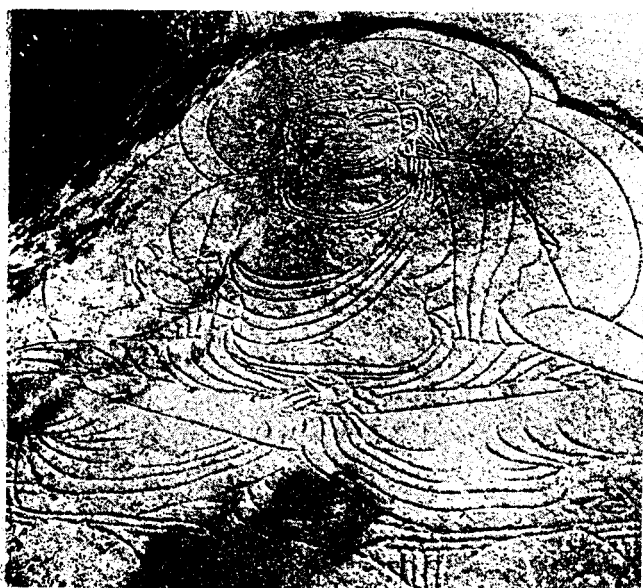
彌勒石は今高さ五十二尺、幅四十二尺の大岩壁に擧身光式の彫り凹めを作つただけが残つてゐる。そして笠置山には猶高さ廿二尺、幅十六尺の文殊石、高さ四十尺、幅卅一尺の藥師石、高さ四十八尺、幅廿七尺の金剛界石、高さ四十尺、幅卅三尺の胎藏界石があり、夫等の壁面には夫々彫像があつたといふのである。ところが不思議なことに之等の諸像及び兩界曼荼羅は古來諸書に一つ

とが分る。その中に第 104 圖の如き笠置の彌勒像の見取圖が見える。我々は之によつて今はなき笠置寺の本尊を想像する譯であるが、中尊の左右に栴香爐を擧げた比丘と袈裟を握つた比丘が描かれてゐる。此の栴香爐を擧げた方と全く同じ形の比丘は山西省太原縣天龍山石窟の第二窟西南隅壁の浮彫にも、第三窟東南隅壁の浮彫にも見られる。そして夫等兩窟の兩比丘は何れも圓い頭光を背つてゐることが注意される。此の仁和寺本の表紙裏には「以浮圖委細校合了、浮圖者花藏院大僧正寬曉作也」とあるので、足立氏は「寬曉の圖像と校合してあるとすれば、その圖は餘程信賴してもよいものであらう」と言つてゐるが、私は比丘の頭光を失してゐる一點からも、此の康和本とてさして信憑し得るものとは考へない。殊に袈裟を握つてゐる比丘の姿勢は甚

もその形像が傳はらず、兩界曼荼羅をいふ夥しい諸書にも所見がない。私は思ふ、恐らく之等の名稱は唯單なる岩壁面の名稱に過ぎないもので、元來夫等の岩壁面には佛像や曼荼羅が刻出されてゐたものではあるまいと。若し藥師石に藥師像が、文殊石に文殊像が刻されてゐたとすれば、必ずや何かの書に其の旨が何等かの形で見えた筈である。今日の歐米風の唯物史觀的な教育を受けた我々は、藥師石と言へば必ず藥師像が刻まれてゐなければ承知しないが、昔の人は藥師石といふ岩壁面そのものを藥師として禮拜し、其の岩壁面に自らの眼底に夫々私かに其の像様を想起して、以て心に之を念じ得たのである。之は神像として巨石を用ひ、大木、山等を信仰した日本人としてさして不審なことではない。日本の古い信仰形式であつたのだ。

紀州湯築の藥師
は岩石である

六 所謂虚空藏石に關する疑



第219圖 笠置山の虚空藏石に刻まれる彌勒像

如上の解釋の當れることを最も適切に立證するものが所謂虚空藏石と呼ばれる岩壁面の彌勒菩薩像である。之は様式上藤原時代を溯るものでないから、恐らく大治五年四月の火災後に、本來あつた根本本尊の彌勒如來像が燒損したので、新しい第二世の彌勒像として造顯されたものと見られ、日本世紀や沙石集に信仰が餘り集まらなくなつたといふのは、根本像に新らしく彩色替へをしたり、かういふ新彌勒像を造顯したりしたゝめと見られるが、此の岩壁面は古く像のなかつた頃から虚空藏石として信仰されてゐたのであらう。それを中途に其の岩壁面へ彌勒像を刻んだ。併し信仰はそんな造形的なこと變るものではない。圖像に暗い善男信女達は、虚空藏石に彌勒像が刻まれても依然として之を虚空藏石として信仰し、虚空藏石と呼び慣はして改めないのである。之が虚空藏菩薩の像でなく彌勒菩薩の像であることは、天治二年在銘の今宮神社の四佛石中の、南方彌勒菩薩像の頭部と之を比較し、唐招提寺講堂や地獄谷の本尊彌勒像の手と之を比較すれば自ら明らかである。像は高さ四十二尺、幅廿四尺の岩壁面に、擧身光式の彫り凹めを作り、中に像高

約三十尺に餘る坐像を線刻してゐるのであるが、此の像には多分に密教圖像的ところがある。寺傳に弘法大師が此の像の前で虚空藏求聞持法を修したといふが、もとより其變古いものではない。之を空海に結びつけようとする寺傳の中には、恐らく大野寺が空海の創立だといふ傳が混在してゐよう。尤も空海の修法は像のない巨石の前で行つたとも見得よう。

昭和十八年七月廿八日

地獄谷石窟の壁畫

一 石窟の現狀

地獄谷の石窟は俗に聖人窟或は穴佛と謂ひ、石材を切り出した後が石窟になつてゐるところへ、其の三壁面に向つて各壁面に三



第220圖 地獄谷石窟の入口(上)と内部(下)

體づつの佛像を刻んだものらしく、各壁面の中尊のみが坐像で、兩脇侍が立像になつてゐるところから見ると、三壁面は夫々三尊佛の表現と見られる。窟は西南に面してゐて、東北面以外の二面は、今三尊中の一脇侍を闕いてゐる。従つて之が三尊形三面の表現であることに氣づいた學者はないやうである。

東北面の中尊は彌勒菩薩の坐像で、其の向つて右は十一面觀音の立像、左は一般に藥師如來の立像と謂はれてゐる。頭部、眼、眉には墨を施し、其の他の全身には朱を塗つてゐる。

北西面の中尊は轉法輪相の阿彌陀如來坐像で、其の向つて右は立像であることが分る切りで、尊名は壁面の闕けてゐるために分らない。左の脇士は全く闕け失せてゐる。此の面の二尊には今彩色の痕跡を見ることが

の中で最も優れたものゝ一であらう。殊に細長い石壁面一杯に太い線で不動や觀音を描いてのけてゐるのは凡技ではない。

昭和十七年九月一日稿
昭和十八年八月九日補

大野寺の岩壁畫

一 大野寺の創立

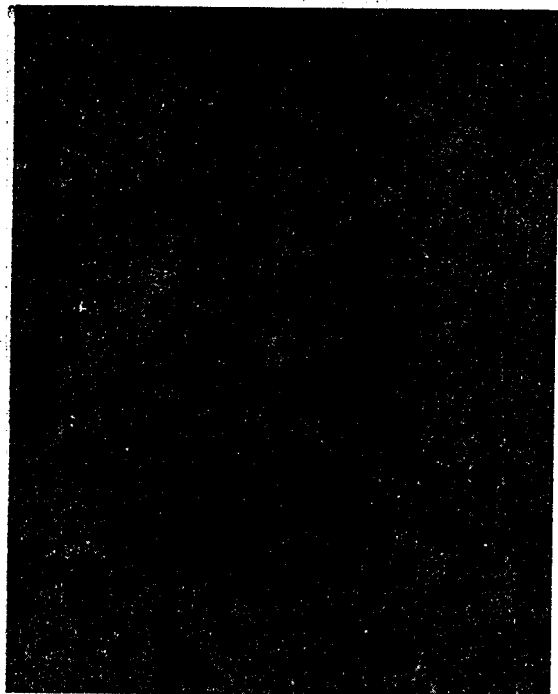
賢環や修圓の創立した室生寺が空海の創立と誤られて以來、奈良縣宇陀郡三本松村大字大野の大野寺も、亦空海の創立する寺と稱してゐる。之は此の寺が古くから室生の西大門だと室生寺で言はれてゐたので、西大門である以上、其の創立者は室生寺と同じであらうと推定され、かゝる縁起を生んだものと見られるが、此の寺は其の位置からも、かの有名な大野川對岸の彌勒の岩壁を拜するための禮拜堂として建立されたことは明白であるから、之は恰

かも笠置寺が、笠置山の岩壁に刻まれた石佛の禮拜堂として創立されたと同じ事情、大谷寺が大谷の石窟の禮拜堂として誕生したと同じ事情にあり、我々はかゝる明白な事實を如何はしい後世の寺傳によつて蔽ひ否む必要はない。

二 岩壁の彌勒像

大野川の岩壁に刻まれてゐる彌勒像は奈良縣の史蹟調査報告に據れば、總高四十五尺五寸、光背幅十四尺一寸、地盤より壇上までが十一尺五寸、肩幅十尺、頭長六尺二寸八分、面幅三尺七寸五分、左眼の長さ六寸七分、右眼の長さ六寸六分、鼻幅八寸四分、口幅九寸八分、唇長八寸二分、耳長二尺五寸八分、蓮臺幅十一尺一寸五分であるが、後述の如く之は笠置の彌勒石像を模したものである。笠置の彌勒は天治元弘の火災に燒損して今は頭光と擧身光の彫り廻みを遺すのみである。

第234圖 大野寺の彌勒石



が、我々は此の模刻によつて今はない原石像を考へることが出来る。先年この大岩壁の前に足場をかけて拓本をとつた時、胸部の
回みから經卷様のものを發見したが、夫等は何れも判讀することが出来ないものであつたといふ。この大石佛の向つて左に種子で
尊勝曼荼羅が刻まれてゐる。紙本、絹本に書かれた法曼荼羅は非常な數に上るが、岩壁面に鐫刻された法曼荼羅は必ずしも多くは
ない。

この岩壁については興福寺別當次第等に詳細な、確實な記載がある。即ち雅縁大僧正の三度目の任記、承元記の條に
大僧正頃年以來、發清淨大願、傳法院領大野郷之内、削平磐石半腹、奉彫彌勒立像、蓋笠置石像以爲規模而已、佛像神異、靈
驗濟々多、承元三年_己三月七日_庚被遂供養、以小田原住瞻空法師、爲唱導、非有殊德人以、不受之、供養之日、有上皇臨幸、
木像繪像者、雖相好嚴麗、恨之非不朽、至石像者、殆可至遠、龍花三會之期、雖不如笠置靈像、今當聖代、奉彫數丈石像、豈非
勝事哉、殊者歎叡信、有御臨幸云々即當供養之日、被行勸賞

とあり、百鍊抄、承元三年三月の條にも「七日、上皇御幸長谷寺并宇多郡内大野石佛、八日、還御奈良」と見え、興福寺略年代記
承元三年の項にも「三月七日、大野石佛供養、有御幸、別當蒙賞」と見えるのである。即ちこの大野の地は室生寺の創立者の一人
修圓の創立した興福寺内の傳法院今奈良市新湊泉の地が遺蹟の領であつたのだ。我々は之によつて此の岩壁の大石像が、興福寺の別院として創設
されたことを理解し得よう。「笠置石像以爲規模」と明記してゐるのもうれしいが、昔は今のやうに創作といふことを尊ぶのでな
く、寧ろ信仰の篤いもの、著名なものを模することをこそ尊いことと考へたのであるから、之は誇を以て特記してゐるのである。

承元三年三月七日の落慶供養會には畏くも後鳥羽上皇が此の遠僻邊陲の鄙地に御幸遊ばされたといふのであるから、岩壁の像の楚
顯としては破格の光榮を擔つた譯で、「木像繪像者、雖相好嚴麗、恨之非不朽、至石像者、殆可至遠」といふもの、言ひ方は、今
の石佛愛好者の好んで言ふところと同じである。然も「雖不如笠置靈像」と言つてゐるのは昔の人らしい告白である。我々は此の
氣の毒な告白を聞くに及び、又先年東海道沿線に如何はしいコンクリートの觀音像の造られたのを考へ併すると、精神文化の造形
表現は、時代ととも退化してゐることを認めざるを得ない。

京都府相樂郡當尾村大字岩船に同じく笠置の彌勒像を模した磨崖佛があり、高さ八尺、頭光と身光を五分許り彫り沈め、中に彌勒の立像を陰刻して

「願以此功德、普及於一切、文永十一年^{甲戌}二月五日、爲慈父上生、永清造立」と刻文があり、之によつて岩船の彌勒は大野寺の大彌勒より僅か六十五年後の造顯たる事が分るが、今兩者を比較すると、大野の石像の流石に立派なことが首肯される。

三 尊勝法曼茶羅の考證

別當次第には尊勝曼茶羅を併せ作つたことを言つてゐないが、特に之だけが後に造顯されたと見る必要はあるまい。種子の悉曇書道史上に於ける様式からも、承元頃のものととして適當である。

尊勝曼茶羅とは尊勝佛頂を主尊とするもので、消災、除病、滅罪、求子等のために尊勝法を修する時に用ひるものである。佛頂とは佛智の最勝を標幟する佛をいふ。尊勝曼茶羅に次の四つがある。

第一は、尊勝佛頂修行瑜伽法儀軌によつて描いたもので、中央に法界定印の上に八輻輪を安じ、蓮華座上に結跏趺坐した大日如来を置き、四方四隅に放光、發生、勝、尊勝、廣生、最勝、無邊聲の八大佛頂を描き、上に天蓋あり、下に香爐あり、上方左右に淨居天を飛翔させ、下方の左右に降三世と不動を描いてゐる。

第二も、同じく尊勝佛頂修行瑜伽法儀軌に基いたものではあるが、第一の夫れとは全く異り一名甘露山曼茶羅ともいひ、禪窟の前に釋迦が結跏し、右方に帝釋天と其の眷屬が、左方に乾闥婆と其の眷屬が描かれ、佛の左右には四天王と其の眷屬が描かれてゐる。圖は覺禪鈔(第二)に見え、前方の香爐が白象の上にあるのもゆゑしく、佛の前には鳥獸蛇等が法悦に遊んでゐる。

第三は、智證大師の將來にかゝる、三井寺後唐院の曼茶羅で、中央に金剛界の大日如来を描き、右に降三世、左に不動尊を描いてゐる。

第四は、佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌に、大日如来と八大菩薩の九尊を説いてゐるのに基いて描かれたもので、佛前に除蓋障菩薩をそれから右へ旋廻して、次第に地藏、觀自在、彌勒、虛空藏、文殊、普賢、金剛手の八大菩薩を描くのである。

大野寺の尊勝曼茶羅は此の第四の佛頂尊勝陀羅尼念誦儀軌によるもので、彌勒菩薩は右肩に位してゐる。以て此の曼茶羅が彌勒石佛の左方に鐫刻されてゐる所以が明らかになつたであらう。即ち之等一具の磨崖佛は、尊勝曼茶羅が主であつて、かの彌勒大石佛の如きは従である。主尊はどこまでも大日如来であらねばならない。かう理解して來ると、尊勝法曼茶羅の造顯年代は爰に確實

な根據を以て、承元三年と限定され得る。

昭和十七年七月廿七日

奈良坂般若寺十三重石塔の石刻畫

一五つの般若寺

般若寺の混同は鎌倉時代に始まる。元亨釋書に醍醐寺僧觀賢が仁和寺の西北に創立した、今昔物語集一九に「般若寺覺緣律師弟子僧信師遺言語」として見ゆる般若寺を「賢開和州般若寺」と記してゐる。爰では恰かも奈良坂般若寺が延喜年中に創立されたかの如くであり、大和志には貞觀五年九月に於ける「添上郡般若寺」三代實錄の存在を認めつゝ、猶且「般若寺、般若坂町、正堂、十三層石塔、寺記云、延喜中、僧正觀賢建」と記してゐる。止宮聖德法王帝説の裏文書に

私云 曾我日向子臣、字無耶志臣、難波長柄豐碓宮御宇天皇之世、任筑紫大宰帥也、甲寅年十月癸卯朔壬子、爲天皇不忿、起般若寺云々固京時、定額寺之とある般若寺は、福岡縣筑紫郡水城村大字片野字般若寺に、凹柱座ある心礎を遺し、奈良朝の瓦觀世音寺藏を出土する廢般若寺のことであるが、狩谷核齋は法王帝説の證註にこの般若寺を説いて

大和志云、般若寺、在奈良般若寺村、元亨釋書云、觀賢開般若寺、大和志據之、舊跡幽考云、聖武帝建、並謀、蓋是寺、白雉五年、曾我日向勳建、至聖武帝、爲定額官寺、延曆遷都後、稍荒敗、於是、延曆年中、觀賢重修也

と、筑前の般若寺、奈良坂般若寺、京都の鳴瀧般若寺を、奈良坂般若寺に擬してゐる。延曆僧錄日本高僧傳要文抄所引に太子建立と傳へる寺を擧げて

先造大官寺、又爲弓削大連起亂、於攝津、造四天王寺、度人出家、而弓削殞、大祚克寧、又造法隆寺及皇后寺及橘寺、妙安寺、般若寺、造僧三寺、造尼寺五、合八所

とある。之は七大寺巡禮私記に

別當法德、爲安斯舍利、觸般若寺別當、迎彼寺之塔、所敬安置、件般若寺亦號片岡寺云々

とある、奈良縣北葛城郡志津美村大字畠田字尼寺にんじにある片岡尼寺、即ち今の般若院のことである。寺域に白鳳時代の瓦を出土し、毘沙門堂の本尊の背